

# バザールカフェ

ーばらばらだけど共に生きる場を作るー

Bazaar Cafe: A Place Where Diverse People Can Live Together

松浦 千恵

Chie Matsuura

バザールカフェスタッフ, 精神保健福祉士

Bazaar Cafe Staff, Mental Health Social Worker

Key words: ブレンディング・コミュニティ、エンパワメント、持続可能なソーシャルワーク

## 目的

京都市内のキリスト教宣教師宅の跡地に「誰もがありのままの姿で受け入れられ、多様な価値観を互いに尊重すること」を理念にオープンしたカフェ。お茶を飲んだり、会話を楽しんだり、読書をしたり、仕事をしたり。地域に溶け込み、誰にでも開かれた憩いの場がバザールカフェ。このカフェには近隣の勤め人やご近所さん、大学生、若者が集うと共に、在日外国人、病気や障害を抱えている人、LGBTQ 当事者など社会的マイノリティの人々も多く集う活気あふれたお店だ。

そんなカフェの特性を活かし、困りごとや課題解決という視点ではなく、「心地よい」「楽しい」「おいしい」を入り口として人々のつながりを生み出している、新しいタイプの実践を紹介します。

多様な人が自分らしく過ごせる空間から生まれる「集う人々がエンパワメントされる居場所」の可能性について、バザールカフェの取り組みから学び、「支援する人・される人」の関係を越えて、「ブレンディング・コミュニティ」という支え合いのかたちを共に考えたいと思います。

## 方法

まず第1に、バザールカフェの歴史を概観する。1988年、キリスト教関係者や市民団体のメンバーらがHIV感染者の支援のために立ち上げ、その後国籍やセクシュアリティ、年齢にかかわらず様々な人たちが自然体で過ごし、相互理解を育んできた空間のプロセスを解き明かす。第2にスタッフの松浦が経験してきた複数の事例を題材に提示する。例えば、松浦が勤務するクリニックとカフェでは、依存症患者へのアプローチが違う。クリニックでは、福祉支援者として面談などを行う一方、カフェでは福祉の知識も時に活用しつつ、知人や友人として接する。クリニックのデイケアになじまなかった患者をカフェに誘い、改善した例もある。第3にスタッフや仲間たちと積み上げた実践をまとめた書籍(2024年7月刊行)をたたき台として、バザールカフェの特徴やその可能性について提起する。

## 結果

多様な人の居場所として発揮するバザールカフェの良さとは何か。福祉施設や相談所だと、そこに行くことで何らかのレッテルを貼られると感じる人がいる反面、カフェなら誰でも行きやすいし入りやすい。スティグマではなく、等身大の存在として受容し合う関係、環境があり、そんなところに仲間がいて、悩みを聞いてくれたり、相談に乗ってくれたりする。そして、さまざまな背景を持つ人たちが来ているので、良い意味で混ざり合いから困り事の解決につながる出会いやヒントが生まれて活かし合うことが可能となっているかもしれない。これがバザールカフェの良さであり、魅力ではないかと思う。

またカフェでの交わりだけでなく、さまざまな団体がパーティーやセミナー、勉強会、ライブなどを開催していて、そうした縁もあって益々「ちがいを豊かさに共存する」つながりが増えていることも強みの一つと言える。

## 考察

バザールカフェの営みや地域活動と、対人援助現場とはまだまだ隔たりが厳然としてあるが、それでも社会に集う「多様な人たちとどうしたら共に生きていけるのか」は、対人援助職に携わる者にとっては重要なミッションであり、その架け橋としての働きが求められる。

しかしバザールカフェでは、支援目的で関わり始めるも、続けるうちに様々な背景を持つ人たちと交わることを通して、自分の方が癒されたり、支えられたりしていることに気づく。そこには“誰かのために”ではなく、自分のために必要だと感じられることがブレンディング・コミュニティたるバザールカフェの強みの所以かと言えらるだろう。

## 参考文献

- ◎「バザールカフェーばらばらだけど共に生きる場をつくる」狭間 明日実/佐々木 結/松浦 千恵/野村 裕美/メンセンディーク, マーサ/白波瀬 達也【著】学芸出版社刊
- ◎ホームページ : <https://www.bazaarcafe.org/>